磯の香

15周年記念号

「きじひき高原」(北斗市)から函館を望む

上磯のホッキ貝採り

東京上磯会　会報　第6号

平成20年懇親会風景

会長挨拶

創立十五周年に想う

東京上磯会会長
郷内　繁

平成七年に産声をあげた東京上磯会は、早や十五周年を迎えることとなりました。

「優しさと思いやり」の心を蘇らせる場として、また厳しい現実社会での生活からくるストレス解消の集いとなってくれればとの想いで、今日まで続けてまいりました。

現在は会員数三百名弱、毎年一度開催される定時総会・懇親会には、およそ八～九十名の出席者を得ています。このことはひとえに、会員皆様のふるさと『上磯』（北斗市）に寄せる郷愁の根強さを物語るもので、これをいつまでも燃やし続けて欲しいものと願っております。

この間一番の思い出としては、創立十周年記念行事として「ふるさと訪問旅行」を敢行したことでしょうか。私共の予想を遥かに上回る七十名を超える参加者を得て執り行われたことはご承知の通りですが、その際、海老澤町長（現市長）初め、町のお歴々の方々の文字どおり、町をあげての心暖まる盛大なおもてなしを受け大感激したことが、つい昨日のように思い出されます。

ご案内いただいた街並み、諸施設等大きく変貌を遂げたふるさとを観、その行政手腕に敬服した次第です。また上磯の奥座敷、特に木地挽山キャンプ場からの平野を見下ろす眺望、そして遠方に駒ヶ岳の勇姿がみられ圧巻でした。

ふるさとがこんなに懐が深いとは知りませんでした。そして現在、北海道新幹線の新駅が北斗市に出来ることになり、それに伴うまちづくりに鋭意努力されているとのこと。益々発展前進するふるさと北斗市に大いに期待すると同時に、ここで生まれ育ったことを誇りに思います。

さて、今後の東京上磯会ですが、さらなる発展を期するためには、年一度の定時総会・懇親会のみならず、例えば新年会・観桜会・観劇・小旅行等、もう少し企画を増やし、会員相互の親睦をより密なものとし、また若年層の新規参入にも力を注がなければと考えております。

さらには、近隣市町村の在京グループとの交流を進めることも必要かと思われます。幸い当会の執行部もかなり充実してきており、ある程度の施策が可能な状況にあります。一つづつ実施してまいりたいと思います。

「ふるさとは遠くにありて…」なんて時代は過ぎ、いまでは交通手段の発展と情報システムの充実で、ふるさとが本当に近くなりました。従って、ふるさとへの意識に若干の変化があるとは思いますが、あの山や川、海そして食べ物、言葉これら全てが〝上磯の匂い〟です。このふるさとへの想いは格別なものがあり、決して忘れ得ないものでしょう。

最後になりましたが、当会発足以来、市から受けた御協力は計り知れないものがあり、年一度の総会・懇親会には市長初め、市関係者、市議会の方々の出席を賜わり、また参加者には北斗市の名産の手土産を頂戴するなど、そのご配慮に対し心から感謝申し上げます。

我々東京上磯会はふるさと北斗市のさらなる前進を願い、今後もエールを送り続けたいと思います。

北斗市市長挨拶

東京上磯会創立十五周年を祝して

北斗市市長
海老澤　順三

東京上磯会創立十五周年にあたり、心からお祝い申し上げます。

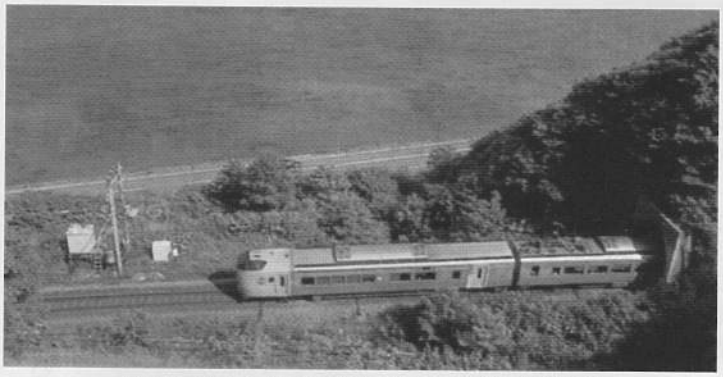
貴会は、ふるさと上磯の出身者やゆかりのある皆様が、遠くふるさとを離れても、いつまでもふるさとに愛着を持ち、ふるさとに対する共通の思い出を土台に、会員同士の親睦を深め合い、ふるさと上磯、北斗の限りない発展に寄与することを目的に設立されました。昨年からは、旧大野町出身者へも門戸を広げ、入会を認めていただくなど、設立から十五年の年月を経た今日では、名実ともに、確固たる基盤が築かれているものと存じます。この記念すべき節目を迎えるにあたり、歴代会長をはじめ、関係各位のご労苦に対し、深く敬意を表するものでございます。

さて、北斗市の誕生から、早いもので丸三年が過ぎ、四年目を迎えておりますが、私がこの合併で一番大切に思い、力を注いで取り組んで参りましたことは、市民の融合、融和を図ることでございます。この融合、融和というものは、ただ単に同化して、一体となればよいというものではありません。上磯、大野の両町は、お互いに一〇〇年を超える歴史を刻み、長い間育まれてきました伝統や地域特性などといったものがありますが、これを尊重しあうことによって、まちづくりに素晴らしい発想が生まれ、新たな可能性を生み出す原動力となってくれるという思いがあるからでございます。

お陰様をもちまして、市民の融合、融和は順調に進展し、確かな未来を次世代に引き継いで行こうという思いや〝市民が主役のまちづくり〟という私の政治理念が、市民の間に着実に根付いていることが至る所で感じられ、大変嬉しく、心強く感じているところでございます。

これからの本市の未来を考えますと、今は未だ、ほんの始まりの一ページに過ぎないといったところでございますが、未来に向かって、確かな道筋をつける大変重要な時期でもあると存じます。ふるさとでは、いよいよ北海道新幹線の建設工事が平野部でも始まり、平成二十七年度の新函館（仮称）駅までの開業に向け、工事の槌音が高まって参りました。新幹線の開通により、東北や関東地方とのさまざまな交流が活発化することが予想されます。私は、この機会を千載一遇のチャンスと捉え、企業誘致や定住条件の整備を図ることで、本市の未来には明るい展望が開け、確かなものになってくると確信をいたしておりますので、東京上磯会の皆様には、今後とも、ふるさとの応援団として、さまざまな場面において、お力添えを賜りますようお願い申し上げます。

終わりに、東京上磯会のますますのご繁栄と会員皆様のご健勝、ご多幸をお祈り申し上げまして、お祝いのご挨拶といたします。



青函トンネルを抜け函館湾を望む津軽海峡線

議会議長挨拶

創立十五周年を祝して

北斗市議会議長
小泉　征男

東京上磯会創立十五周年を迎えられるに当たり、市議会を代表して一言ご挨拶申し上げます。

一口に十五年といいましても、設立から今日まで、ご尽力されました役員の方々を始め関係各位に深く敬意を表するとともに、心よりお喜びを申し上げる次第であります。

東京上磯会の皆様は、それぞれの分野でご活躍をいただいている方ばかりであります。今はふるさとを離れておられますが、もともとは上磯町（現北斗市）でお生まれになり、上磯町で成長された方々、また、学校や仕事の関係で、一定期間本市に住まわれた方々であり、北斗市の魅力、見所を熟知されている方々です。

二十一世紀は情報化の時代といわれております。地方公共団体もその流れに乗り遅れてはいけません。これまでのように求められて公開するという待ちの姿勢ではなく、本市の魅力をできるだけ多くの方々に知っていただくことが必要です。そうした取組の積み重ねが、やがて企業誘致や観光客の誘致につながっていくものと思っております。そうした意味において、首都圏における北斗市の情報発信拠点として、皆さんの活動はたいへん意義深いものと考えております。

今後、皆様によって本市の魅力が一人でも多くの方々に知っていただき、それをきっかけとして、北斗市を訪れていただけるというように北斗市を取り巻く輪が大きくなって、やがて日本中に広がればいいなという、そんな大きな夢を持っております。

どうか東京上磯会の皆様におかれましては、健康に十分留意され、一層のご活躍をいただきながら、貴会の益々のご発展をご祈念申し上げますとともに、併せて、ふるさと北斗市のＰＲもよろしくお願い申し上げ、お祝いの言葉といたします。

北海道のトラピスト

連絡船が函館港に近づくにしたがって、函館山の左手にかなり大きな山が見える。その形がまるいところから、村人たちは丸山と呼んでいる。この丸山のふもと、津軽海峡を見下ろす小高い丘に修道院がある。「渡島当別駅」で下車して徒歩25分。深い緑にかこまれた赤レンガの建物と、修道院まで一直線にのびるポプラ並木は印象的である。

北斗市関係挨拶

東京上磯会創立十五周年を祝して

北斗市商工会会長　宮崎　高志

東京上磯会が創立十五周年を迎えられますこと、心からお祝い申し上げます。

一口に十五周年と言いましても、創立から今日までに至るまでの努力に対し、歴代会長を初め役員、会員皆様には深い敬意を表するものであります。

ふるさと上磯に愛着や思いをめぐらす方々が相集い、情報交換や親睦を深めて来た結果がこうして実を結んだものと感銘をいたしております。

私ども商工会も昭和三十六年に設立され間もなく創立五十周年を迎えようとしておりますが、この間、発足時の会員数も三百五十名から六百二十名に増員し、当時の上磯町の深いご理解ご支援の下、着実に地域経済団体としての役割を果たしてまいりました。

しかし、平成に入り大型店進出が又今日では経済不況の荒波に飲み込まれるごとく、会員企業の疲弊が大きな問題として横たわっているのが現状であります。

当会も北斗市誕生と合わせ、旧大野町商工会と合併し三年を経過した現在は八〇〇名余りの大所帯となりましたが、お互いの歴史、伝統文化、特性を重んじながら会員間の融和に努め、微力ながら北斗市まちづくりに役職員一丸となり努力いたしておるところであります。

ふるさとでは、平成二十七年度北海道新幹線新函館駅（仮称）開業に向けた建設工事が着実に進められ、山間部のトンネル工事も六〇％以上が進捗するなど、その槌音が大きく感じられてきております。

私どもは、この機会を経済の交流や観光客誘致などにつなげながら、地域経済の高揚を図る千載一遇の機会と捉え、未来ある北斗市の発展に一層の努力をして参りたいと存じます。

東京上磯会の皆様は大都会の中枢におられ、あらゆる情報収集が可能な場が多くあろうかと存じ、今後も私どもの会員企業に対して一層のお力添えをいただければ幸いと念ずるものであります。

私自身、毎年貴会総会にお招き頂いておりますが、皆様の活力あるお姿にはいつも驚嘆するばかりであります。これからも健康にご留意され、ますますのご活躍とご多幸を、そして東京上磯会のご発展をご祈念申し上げまして、お祝いのご挨拶と致します。

和菓子・洋菓子（ジョリ・クレール）

有限会社　末廣軒

代表取締役　佐々木　博史

住所　：北斗市中央2-1-4

TEL　：0138-73-3122

FAX　：0138-73-4013

http://www.hokuto-jolicreer.com/

北斗市商工会

会　長　宮崎　高志

副会長　伊藤　哲朗　渡辺　晃男

住所　：北斗市飯生3-4-1

TEL　：0138-73-2408

FAX　：0138-73-2474

http://www5.ncv.ne.jp/~aid-03

北斗市関係挨拶

創立十五周年を祝し、限りない発展を

北斗市観光協会会長　佐々木博史

東京上磯会創立十五周年を迎え誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

貴会が平成七年に創立されて以来、故郷「上磯」を忘れることなくゆかりのある方々が会の結束の下、ふるさとの限りない発展のためにご尽力されてこられたことに深く敬意を表すとともに厚く御礼申し上げる次第であります。

当観光協会も昭和六十年に設立し、北斗市誕生にあわせ旧大野町観光協会と合併し明年二十五周年を向かえることとなりますが、観光都市函館に比べると到底およばないものの地道な活動により、地域のPRに努めて参ってきているところであります。

さて、北斗市ではご承知のとおり平成二十七年度の北海道新幹線開業に向けた工事が順調に進められており、この一大事業に対する市民や地元企業の方々の期待は日増しに大きくなってきており、北海道新幹線新函館駅（仮称）のまちとして全国的に知名度がアップされることとなります。

この機会を捉え、全国各地から観光客誘致を図り、商工会や各関係機関と連携し北斗市内の景勝地や観光施設、地場農水産物や特産品等積極的に紹介し、北斗市の発展に結びつけてまいりたいと考えております。

東京上磯会の皆様は、北斗市を誰よりも熟知されている方々でいらっしゃいます。どうか全員北斗市観光大使となった気持ちで、千載一遇のこのチャンスに大いにふるさとの魅力あふれる自慢話をしていただき、誘客運動にご協力をお願いしたいと思います。

終わりになりますが、東京上磯会のますますの限りないご発展と会員皆様のご健勝並びにご多幸をお祈り申し上げ、お祝いのご挨拶といたします。

函館湾と北斗市

函館山（334m）はかつては函館湾に浮かぶ島であったが、右手の亀田半島側と左手の函館平野側の両方から砂州が伸びてきて陸繋島となった。島と陸繋砂州に抱かれた内湾は函館港として利用され、湾岸線には埠頭やドックの埋め立て地が多数造成された。波の荒い外海側は自然の海岸がよく保たれ、函館山の先端は海食崖で削がれている。背後には亀田半島をつくる火山性山地が横たわり、平野の東限となる北斗市が広がっている。

北斗市観光協会

会　長　佐々木　博史
他・役員一同

住所　：北斗市飯生3-4-1（北斗市商工会内）
TEL　：0138-73-2408
http://www5.ncv.ne.jp/~aid-03

十五周年を迎えて

◆副会長　金谷　忠勝

十五年前に発足された東京上磯会、その年に私は、東京から札幌へ単身赴任し、発起にあたって何も尽力出来なかった事が、申し訳なく思っております。

その私が、昨年副会長を拝命致しました。この六月まで現役の会社勤めでしたので、幹事の方々には大変ご迷惑を掛けて居ります。

昨年の総会には、北斗市高谷副市長をはじめ役所の関係者、市の有力者を含め、一〇〇名弱の方々の出席の下、盛大な会となりました。

各テーブルを廻って見ますと、やはり会話は田舎（旧上磯）の事。故郷を後にして永い方々、故里を想う心が、年数を重ねるごとに強くなっているように感じました。

東京上磯会から北斗市への協力、支援等は、中々出来ませんが、青春時代を過ごした上磯を想う気持ちを持った者が集い、語らい、笑い、相談し合うその様な会になることを、切に願うものです。

今後の上磯会のさらなる伸展を祈願しようではありませんか。

◆事務局長　小松　直樹

東京上磯会の幹事として十周年、十五周年の節目を経験することになった。

十周年記念の際は、ふるさと上磯を訪ねる『ふるさと訪問ツアー』を企画し、総勢七十名ほどが一泊二日の旅程で上磯町を訪問し、町より大歓迎を受けた事は記憶に新しい。

あれから五年、毎年定例総会・懇親会を東京で開催。総会・懇親会には首都圏在住の会員八十名ほどが参加され一年ぶりの再会を喜び合います。

故郷を遠く離れ首都圏で生活し、すっかり都会人になった皆さんでありますが、なぜか〝ふるさと上磯〟を忘れられず、案内状が来るとついつい足が会場の方に向いてしまいます。

「ふるさとは遠くにありて思うもの」と言いますが、いつも気にかかるのがふるさとであります。

総会・懇親会では毎年同じような顔ぶれでありますが、いつもの参加者がいらっしゃらないと無性に寂しく、〝体調を崩したかな〟などと心配になるものなのです。そして昨年お会いした顔と今回も会うと無性にホッとするものなのです。

懇親会では市長（合併前は町長）はじめ幹部の方々のご臨席を賜り、なつかしい故郷の変わりよう、状況等々を聞くのが楽しみになっています。

余興では唄あり、詩吟あり、踊りあり、そして定番のハーモニカありで芸達者な方の飛び入り芸も楽しみなものであります。

そして、最後には〝来年もまた会いましょう〟とそれぞれの気持ちを込めた挨拶で別れて行きます。

故郷への暫しのタイムスリップの場を設定するのが、ふるさと会の意義なのでしょうと思う昨今であります。

◆会計　加藤　和子

当会が発足十五周年を迎えることが出来たことに非常な喜びを感じております。

初代会長の故相馬正樹さん（当時は東海大学名誉教授）が平成七年二月二十五日の創立総会を立上げ、その後行なわれた第一回総会から数えて今年は十五回目の総会・懇親会にあたります。目下、郷内会長のもと私たち役員は一丸となって総会準備を行なっています。

また、私たち茂辺地会員の有志は、この記念する懇親会に茂辺地小学校時代の恩師であります古閑隆先生を招待する事に致しました。

先生は現在七十七才の喜寿ですが、年令を感じさせない青春が漂っていて、日本空手松涛連盟函館支部の会長など地域のいろいろな団体の役員を行なっています。

先生からは旅なれていないので「不安ではあるが皆さんに会いたい一心で〝よし〟行くぞ！」と言う喜びの手紙をいただきました。

先生に会うのを楽しみに、縁のある会員の皆さん、どうか会いに来て下さい。

随想・随筆

今はもう無いふるさと峩朗

武井　満野子（旧姓　根津）

上磯の町から、石の運搬電車にゆられ、三十分ほど走り続けると小さな部落がある。そこが山奥の村、峩朗です。

日本セメントの原料となる石を採集する山の裾野にある二百軒足らずの集落です。

私は、三歳～十六歳までそこで育ちました。いろいろな思い出が沢山あるところです。

それぞれのお父さんは皆さんセメント会社の社員で、その家族達の集まりです。隣近所、一軒々々の家族構成もよく分かり、どこの誰それが、何々とすぐに知れ渡りました。特に、皆さん善い人ばっかりに思えてなりません。

また、私は父親の無い子どもでしたので、校長先生が全校生徒の前で「根津君のお父さんは、戦争で立派に働き亡くなりました。ですから、皆さんもいじめたりしないで仲良くしてあげて下さい。」と言って下さいました。私はこの様に、皆さんに大事にして貰いましたので、いまだにその言葉が忘れられません。

空気は澄んで、緑いっぱいの山が裏手にありました。山に登ると、海の向こうに函館山が見え、連絡船も浮かんでいました。そういう光景を見に、よく山に登りました。

あれから四十数年、平成十三年母の葬儀で帰省した際に、車で連れて行かれました。私の住んで居た所はもとより、ひと山全てが無く、神社の鳥居だけが残っていました。

この歳（昭和十七年生）になって今もし、昔の町があれば、またそこで暮らしたい。そんな気持ちでいっぱいです。

本当に思い出多いふるさとです。

浜分小学校の思い出と、上磯町から北斗市へ

高村　享

北海道上磯郡上磯町字追分を離れ三十五年が過ぎたころ、ひょんな事から東京上磯会に参加する様になり、毎年、秋の風に乗って年に一度の故郷がやって来る様になりました。

それは色々な事を思い出す為の触媒の役割があるのか、思いが募ったり、忘れていた事がフト思い出したり、実際は古い事なのですが、とても新鮮に心を揺るがす事もあります。まるで、タイムマシーン〝上磯号〟に一日乗車券で乗船しているが如くです。今は〝北斗号〟かな…昔の話です…。

故郷上磯の私の実家は、今では周囲が住宅になってしまいましたが、私が一桁代の歳の頃は、家の四方の内、三方は全て畑でしたから、冬になると辺り三面は白い畑のグランドになり、子どもの頃は積もった雪の上にバタッと倒れ人型を作ったり、雪の畑のグランドを数人で横歩きで踏み固めながら、細い迷路の様な道を作り、そこで鬼ごっこをしたり、玄関の前に雪を積み上げて、水を掛けて一晩たてば、ツルツル滑る面になる雪の滑り台を作ったりして遊んだものです。夏より冬のほうが思い出が強いのは、やはり北国だったからでしょうか。約五十年前になる小学生時代の事が今でも我が心に残っている事と、タイムマシーンに乗って思い出した事を紹介してみます。

ひとつ、人生で初めての学び舎で会った優しい先生で小学生一年、二年の担任だった三浦睦子先生で、フルネームで覚えて言えるのは、不思議と今でも三浦先生だけです。

ふたつ、小学生四、五年の頃に近くのお店（小平商店）に先生に言われ醤油（一升瓶で子どもには重かった）を買いに行かされたこと、またその時に初めて聞いた〝領収書〟と言う言葉、その時は意味が分らなかったので、頭の中で「領収書、領収書」と忘れないように呪いのように唱えながら、お店に歩いて行ったこと。

みっつ、我が家は大野新道と畑を挟んで小学校の反対側に在ったため、小学校の写真をよく我が家の

屋根に登り、写真屋さんが撮影していたこと。

よっつ、運動会の時は、前の日からグランドの回りの道にグランド側に馬車が置かれていて、当日は、一段高いところから見物しているのが子ども心にちょっと羨ましかった。

いつつ、家が学校に近かったので、朝はゆっくりの登校で最高だったのですが、学校の帰り道をみんなで楽しく話ながら帰れなかった。ほとんどの友達は七重浜方向へ帰るので、みんなは楽しそうに話をしながらの帰る後ろ姿を見ながら帰るのが、ちょっと寂しさを感じたものです。

いつつ目の寂しい帰宅時間の項目は、浜分小学校の隣が浜分中学校だったので、九年間続く事になるのでした。

あの頃は、変な話ですが、上磯町は隣町のような感覚でしかなかったような気がします。子ども頭には、海に向かって左側、つまり七重浜、五稜郭、函館が身近であり、自分が住んでいる所は、上磯でなくオ・イ・ワ・ケ（字追分）でしたし、また年賀状や手紙の住所には上磯町って書いていたのに、大人になっても何故か、故郷イコール上磯町という感覚は、正直あまりありませんでした。が、東京上磯会に参加している中で、色々な出会いと思いにより、だんだん何か意識するように、古里・故郷・ふるさと…と思うようになってきたところで、片思の相手が引っ越して行ってしまった様に、上磯町の名前が消えてしまった事は、とても寂しく残念です。

でも、出世魚が成長毎に名前が変わるように、上磯町が北斗市に成長したと考えれば、これも良しとして、これからの故郷・北斗市の成長に期待しようと思います。

すずらんを愛でて

小田島　二郎

すずらんの花　胸にいだいた
可愛い娘よ
君の心は　すずらんのよう
気高く香るよ
ランディシー　ランディシーやさしい乙女よ
ランディシー　ランディシー

この詩はご存じのロシヤ民謡の一部です。一九七〇年代頃（ダークダックス）の訳により多くの人に歌われ親しまれて有名になった。

私の若かった頃には新宿の歌声喫茶「ともしび」などで仲間と一緒に唄い、悦に浸たっていたものです。

そして、すずらんは今年も我が家の庭の片隅に一〇株程の可愛い花を咲かせてくれました。

このすずらんは、その昔、今は亡き友人からお土産として送られてきたもので、北の国の土と一緒の鉢植えだった。私にとっては懐かしい貴重な一鉢です。

そして、毎年花を咲かせてくれる。その度に、友を偲び、故里のあれや、これやを思い出しております。私にとってもすずらんは思い出とともに最も好きな花であることは言うを俟たない。我が家では五月の初旬に「鈴蘭の日」を決めて床に並べて「コーヒー」を喫むことにしております。

そこでは、今年の花の咲き具合やら他の花にも及んでのおしゃべりとなり、終いには四方山話しも弾んだりして幕になるのが毎度のことなのです。そうです「すずらん」は道の花ですもね！

『すずらん五句』

◎すずらんや在所の香り運びきて
◎すずらんや君は乙女のままなりし
◎すずらんに一人ごちしてときを待つ
◎すずらんの香や故里を近くして
◎すずらんの咲きて故里庭にあり

八五翁　北州

祝
東京上磯会15周年
東京上磯会
会長　郷内　繁
東京都港区高輪3-10-18-601
tel 03-5424-0002

「上磯会」への思い

横浜富士見丘学園中等教育学校
校長　豊岡　稔

「東京上磯会」の会員の皆様方、お元気でお過ごしのことと思います。そして、会の運営にご尽力されています会長様はじめ、幹事の皆様方に心から感謝申し上げます。

ふるさと〝上磯〟を離れて、東京・横浜での生活がちょうど五十年になりました。ふるさとへの思いは、年をとると共に強まっていく感じです。

上磯小学校、上磯中学校、それぞれの時代で経験した数多くのことが、今ある自分の原点になっていることを強く思う時に、ふるさと、そしてふるさとの多くの人々に感謝の気持ちで胸がいっぱいになります。

二十一世紀に入り、世の中の有り様が大きく変わり、価値観も多様化し、何よりも先行き不透明な時代です。大人から子どもまで皆、〝生きる〟ことに、安定性を欠いた時代です。そんな現代社会の中、改めて、〝教育〟の大切さを痛感する日々です。

大学を出て、教壇に立って四十五年。中学生、高校生という〝人生の礎〟を築き上げる大切な時期に拘わってきた教師生活。

今実践していることは、〝かけがえのない存在〟である生徒一人ひとりに、自分がふるさとから学ばせてもらった多くの貴重な体験を、ひとつでも多く学校行事に取り入れ、人間として、均衡のとれた生徒を育てていくことです。そういう意味でも〝私〟の心の中に、いつまでも鮮やかに蘇るふるさと〝上磯〟の存在が大切です。

「東京上磯会」が発足して十五年。ここまで多くの人々のお力添えがあり、脈々と受け継がれてきた〝郷土愛〟が、さらに高められていこうとする「東京上磯会」に心から感謝するとともに、ますますの発展を祈念しています。同時に、会合に一回でも多く参加出来るよう努力していくつもりです。

わが青春の青函連絡船

井上　豊（上磯小学校昭和三十年卒）

挫折と悔恨の日々が青春だとすれば、一九八八年青函博の催事の記念就航を最後として長いその歴史を閉じた青函連絡船とオーバーラップしてならない。期待と希望をひそかに抱いてはじめて津軽海峡を渡ったのは、函館から青森までの青函連絡船であったが、それはまた後に待っていた挫折と悔恨の連続に、時に絶望して青森から函館、そして上磯に帰ってきたのも青函連絡船であったからである。

海峡を五十回近く往復したから、十代の終りから二十代までのはじめを青春とするならば、十数回往復したことになる。とりわけ故郷を離れてしか生きる術を見出せなかった私にとって、帰途の連絡船は、暗く内気な性格をますます沈み込ませるものでしかなかった。

また連絡船は、旅行で本州から北海道に渡る人にとっては、すばらしい旅情を感じさせる雰囲気をもち、時に私たちには妙ななつかしさを醸し出させるものであったが、私には一抹の寂寥感を感じさせずにはおかなかった。

年月を経て、故郷は遠きにありて想うことを余儀なくされた現在、若き日を回顧しては今は無き青函連絡船の独特のムードをようやくなつかしく感ずる気分になってきたのは単なる感傷であろうか。

旧桟橋に係留・保存されている摩周丸のブリッジで時のたつのを忘れて佇んでいる年老いた人を見かけたら、それは紛れもなく私なのである。長崎の高台から港の大雪丸を遠望し、青森に停車した「スーパー白鳥」から八甲田丸を眺望し、はたまた東京の船の科学館で羊蹄丸の船内を散策する年老いた人もやはり私なのである。

〈開業2年半〉
技術コンサルタント業
外山技術工事務所
所長　外山　幸雄
［東京上磯会事務局］
神奈川県茅ヶ崎市今宿580-9
tel & fax　0467-88-1684
e-mail yuksoto@jcom.home.ne.jp
http://www.yuksoto.sakura.ne.jp/

ふるさと自慢

吉泉　幸子（旧姓　柳谷）

先日、あるサークルで自己紹介をすることになりました。

その時の条件として「ふるさと自慢」をしてください」とのこと。一瞬「何を」「どこを」「どう」自慢したらいいのかな！（あまりにもあり過ぎて～）頭の中は北海道丸ごとにしょうか、いや、上磯だけにしようか走り回る。短い時間で「わくわくして紹介できるところね～」そうだ！上磯にはトラピスト男子修道院があるじゃないですか！

あの広大な丸山（まるやま）の丘の上から風景が走る。巴湾（函館湾）を眺望。

そこには函館山（臥牛山）をすぐ目の前にして青函連絡船がユックリ往来している。（もうすっかりタイムスリップしています）そして、修道院の特産品、トラピストバター、トラピストクッキー、トラピストミルクあめ。私の話を聞いているメンバー（五十代～六十後半のお顔を想像してください）たれ気味の目をきりっとつり上げ、ランランとした輝きを見せ、ぼーっとしていた気持ちを回想させ生き返らせたひと時でした！

ああ楽しかった！

修道院 丸山から見た巴湾

上磯町「縄文時代後期の環状列石」遺跡発掘される

齋藤　清信（谷川小学校二十二年卒業）

渡島管内上磯町（館野地帯）は富川墨阯と言われ、昭和二十四・五年頃から森林の伐採後の地表、北の谷、沢から古代人が使用された石器、土器類の破片が多数散見していた。昭和四十三年には、この地域一帯を上磯町教育委員会が遺跡指定として、地形の変更、土砂の改良等の開発を禁止していました。

（財）北海道埋蔵文化財センターは、函館開発建設局から委託を受け、平成十五年四月から同年十月末まで「館野地帯」一帯の遺跡調査を行ない、縄文時代後期の古代人が使用した竪穴住居址、石器類の狩猟用具、土器の生活用品類が数多くの出土遺物が発掘されました。

前年に続き、平成十六年十月末までには「館野遺跡」から縄文時代後期（約四千年前）と推定される環状列石（ストーンサークル）が出土された。環状列石の形状は、楕円形で盛土列石の長さは最大三十五メートルで、これは渡島半島の森町「鷲ノ木五遺跡」見つかった環状列石に匹敵する規模と判明された。発掘した場所は、建設中の函館江差自動車道のルートで上磯・矢下来間の旧道入口から神社の階段を昇り切った富川神社から歩いて三百メートル先の標高四十五メートルの海岸段丘上に位置して、東方向には函館山を望む風光明美な場所。道路建設用地に買収されるまでは、森林、畑などに利用されていた。

環状列石の規模は、南東から北西方向に伸びており、長さ三十四メートル、幅は約十九メートルの楕円形で石列は約百十個で三十～七十センチの細長い石をU字型に並べた状態で検出されました。環状烈石の北側と南側にそれぞれ長さ約三十二メートルの盛り土があり土器や石器の破片、動物の骨具類や植物の炭化物などが多数見つかっている。

環状列石の内側には、食料の貯蔵用か、墓だったと見られる深さ百五十センチのフラスコ状ピット（古墳）が十五個をはじめとする遺構群が検出された。北西側の森林地帯は道路建設用地ではないため発掘されないため全体の形状は不明で、今後調査が開始されることにより館野遺跡の全容が解明される。

〈創立26周年〉
総合不動産業
三蔵住建株式会社
取締役社長　佐藤　則道
［東京上磯会幹事］
東京都新宿区西新宿7-16-14
tel 03-3362-2121
fax 03-3362-2051

思い出のホールインワン

佐藤　金也

文化の日（十一月三日）が近づくと思い出すことがあります。いまから一八年前の出来事でした。

この日は絶好のゴルフ日和で社内主催の一〇組のコンペで日頃からお付き合いのある方ばかりなので気楽に楽しめると思い参加しました。

スタートから何となく調子が良く、チップインがあったり普段は乗らない谷越えのショートホールもワンオンしたりでリズム感も最高でした。

仲間内からは「いつもと違うね」「ホールインワンが出るかも…」などの冷やかしや牽制をされながらプレーを続けていました。

アウト最後のショートホール八番　一七〇ヤードをむかえて普段は手にしたことのない四番アイアンを初めて使用しました。フラットなホールでしたが打った瞬間手がしびれボールは低い弾道で右手にあるサブグリーンの方向に一直線に飛んで行きました。方向が違うなと思った瞬間ボールは本グリーン寄りのエッジに落ちてキックし、本グリーンのピンに向かってスルスルと転がってカップに吸い込まれて消えたように見えました。

一瞬、シーンとなりどうなったのかと思っていたら　前の組みの方から大きな拍手があがりました。同時にホールインワン　ホールインワンと聞こえて来ました。

呆然としていたキャディさんも我に返り「ホールインワンです。早く行ってカップからボールを取って下さい」と促され何がなんだか分らないまま走った記憶が懐かしい。

プレー終了後のパーティーではプロのようにピンに向かって一直線にカップインしたわけでもないので散々冷やかされました。中には土手にあたりキックして入ったとかまことに面白おかしく話題にされました。主催者からはプロでも狙って入ることはないのだから自信を持てとか、一打で入ったのだから立派なホールインワンだとか、人にない運命を持っているとか、暖かいお言葉を頂きました。

しかし　心の中ではホールインワン保険に入っているわけでもないのでこれから起こるであろう数々の出来事を想定し嬉しいやら悲しいやらの「ホールインワン体験」でした。

ところで当日のスコアはいくつだったか？？

私の趣味（エジプト文化）

中村　紀之

エジプトと言う言葉ですぐ目に浮かぶのは、ピラミッド、スフインクス、ミイラであろう。

私はこれ等とは別にエジプト文化、特に象形文字（ヒエログリフ）と宗教観に興味を持った。

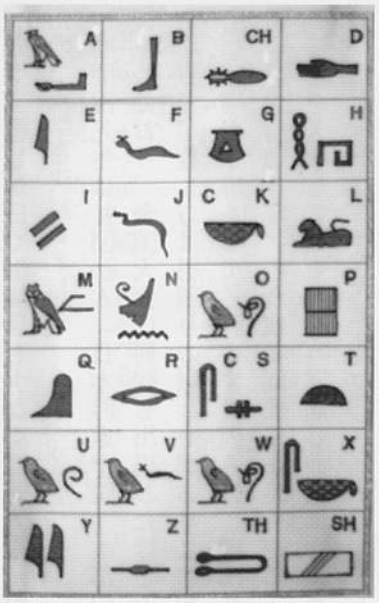
一九六五年八月上野の東京国立博物館でツタンカーメン展が開催され、見学に行った時からさらにエジプト文化に興味が深まった。古代エジプト語は紀元前四千年から紀元後一一世紀まで話されていた。そして古代エジプトで最初に書かれた文字がヒエログリフである。

私は平成十五年四月期のＮＨＫ学園通信講座（古代エジプト象形文字ヒエログリフ入門）を受講し読み方を勉強した。象形文字は以下の歴史的プロセスで解析されるに至った。

一七九九年ナポレオンがエジプト・ロゼッタにおいて要塞を建設しているとき、文字の刻まれた玄武岩の石碑を発見。（この石碑をロゼッタストーンという）「紀元前一九六年ごろに書かれたもの」

碑には象形文字、民衆文字、ギリシャ語の三文字で書かれている。この象形文字の解析をいろいろな人が行った。最終的には仏人シャンポリオンが、この石碑の中の、王を表す記号の中の象形文字とギリシャ語とを対比して解析を完成させた。この石碑は現在大英博物館にある。

象形文字には次の三つのタイプが有る。①絵に直接意味を持たせる表意文字（人物、パン等）、②絵と意味とは直接関係ない表音文字（アルファベット等）、③単語の最後に付いてその単語がどんなものかを表す決定詞（雀：弱いや悪いを表す）。これらの組み合わせで文章を作っている。勿論文章の組み立てには文法もある。



ヒエログリフのアルファベット

たとえば、（である・吾輩は・猫で）の様に動詞・主語・目的語や（花・きれいな）の様に名詞・形容詞のようにである。象形文字は下の表のアルファベットの表記以外に約五千五百あり、そのうち約五千が解明されている。読み方は象形文字の顔の向き側から読む。（右から、左から、上からなど有る）

次いでエジプトの宗教観（死生観）について日本の宗教観と非常によく似ているので紹介したい。これは私が一九六五年以降いろいろなエジプトに関する書物を読むことで意を固くした。

また最近吉村作治先生と梅原猛先生の共同執筆による「太陽の哲学を求めて」（二〇〇八年十二月発行）を読んでやはり太陽信仰の国は神に対して同じような思想になるのかと強く感じた。

日本では三途の川の思想がありこちらは生の国、川のあちらはあの世の国の思想が有る。エジプトでもナイル川を挟み、太陽の出る側（東側）は生の世界で神殿などがあり、太陽の沈む側（西側）はお墓やピラミッドのある側で死後の世界となっている。（上記の本を読んでいただくと詳細に書かれている）日本でも初七日、四十九日、一周忌など有るがエジプトにも「冥界の書」というのが有り、死んでからあの世に行くまで「いつ何処で何をして」と七十日間の冥界の旅スケジュールが全部書かれているという。（ここで七という数字も気になる）

さらに日本では八百万の神がおり、エジプトにも同様に沢山の神がいる。

このように非常に思想的によく似た国同士でありながら、日本とエジプトでは国土の発展があまりにも違いすぎるのを感じた。私は二〇〇六年一月にエジプト旅行をしたが、どうして今から四千五百年も前にあの巨大なピラミッドや素晴らしい神殿などを作れた民族が、想像を絶するくらい荒廃した生活をしているのかについて疑問に思った。現地の案内人は「国が色々な国に侵略されたり、統治していたイギリスがエジプト人の教育に反対した為である」と言っていた。やはり国の成長には教育が一番大切であると感じた次第である。

初めての趣味

坂本東洋志

四十数年間、一つの会社に勤務し続け、飲酒以外に特に興味のあるものは無く平々凡々の生活の中で三年前に還暦を迎えました。この人生の節目を契機に初めての趣味として詩吟を習うことにしました。

以前から東京上磯会の懇親会で拍手喝采を浴びている元会計の藤田さん（詩吟）と幹事の武井さん（舞踊）の演技を観て格好が良いと思っていました。藤田さんからは何回も詩吟を勧められていましたが、仕事の都合もありさりげなく聞き流していました。

六〇才を過ぎて、藤田さんから、自分の会社（大森）に近い品川の詩吟教室の資料が送られて来ました。藤田さんのご好意に応えるべくいろいろ考えていたところ、たまたま、家内の仕事関係からの情報で詩吟教室が柴又帝釈天の近くにあることが分かり、無料体験講座に参加しました。

先生は勝間田龍瀞と言う小柄で愛嬌のある綺麗な女性でした。

柴又教室の生徒は自分より年長の女性が二人だけで、先生は時間をたっぷり掛けて厳しく稽古を付けていました。

先生は感じが良く生徒数も少なく雰囲気も良かったので入学を決意しました。

勝間田先生は社団法人「日本吟道学院」本部の役員をしており、全国大会に何回も出場したほどの有名な方で、教え方は男勝りの厳しさがありますが熱心に丁寧な指導をしてくれます。因みに、藤田さんも「日本吟道学院」の所属で同先生を良く存じていることを入学してから分かり、同じ仲間になったということで喜んでいただきました。

入学してから約二年四カ月（八月時点）になりますが、何をやっても長続きしない自分が、「良くここまで長続き出来たなぁ～」と自分ながら感心しております。

これも、ひとえに先生の情熱指導のお陰であり、更には藤田さんの親身な応援と生徒仲間の雰囲気の良さがあるからだと思っています。

詩吟大会にも既に十回くらい出場させて貰い、昨年は当会の懇親会で武井さんの踊りに合わせて謡わせて貰いました。

特にこれと言って趣味の無かった自分に漸く身に ついてきた詩吟を大切にして、これからの人生を楽しく過ごして行きたいと考える今日このごろであります。

先人からの贈り物

辻田　満子（旧姓　中川）

今から三十年以上前、上野の国立博物館に行ったとき、もう出口に近い辺りで矢不来より出土の土偶（落合氏所蔵）が目に留まりました。

その頃は、まだ学生でたまたま遭遇し、この様な所に展示される物が町内から出土したんだ…くらいの関心しかありませんでした。でも、不思議なことに大きさや形は今でも記憶にあるのです。

今年に入り、函館の観光コマーシャルが奇抜でテレビの話題になり、そのひとコマに土偶が出て来て、それが北海道で唯一の重要文化財と知りました。

私が以前見たのと似ていると思い、北斗市の教育委員会に尋ねたところ、函館の土偶は旧茅部町から出土し、矢不来からのは文化庁が買い上げて現在は千葉県佐倉市の方にあるとのことでした。

佐倉市には国立歴史民俗博物館があり一度行ったことがあります。とても立派な広いところでした。

私は今流で言うとアラ還（六十才前後）で郷愁を感じる年になりました。是非矢不来より出でた土偶に又、会いに行きたいと思っています。

今は東京都練馬区在住です。夫の転勤で北は札幌、山形、埼玉、千葉、南は長崎と十回の引越しをしました。赴任地はどこも見どころ満載でしたが、今思えば勉強不足が悔やまれます。あと一年で定年を迎える夫とあそこも、ここも、行っておけば良かったねと話している次第です。

そんな中で長崎において当時九十才近い母と今は亡き次兄と原爆記念公園と「平和の像」を一緒に見学したこと、また、先輩の坂本東洋志さん（東京上磯会役員）が来長された際に夫と共にタクシーで長崎観光をご一緒させていただいたことが楽しく大切な思い出となっております。

因みに母は満九十三才で毎朝、新聞をながめております。

故小山内正夫様よりの遺稿

事務局より会報「礒の香」の掲載原稿をお願いしましたところ、奥様より手紙を戴き、昨年二月二十八日に旅行先にて急逝されたとの事でびっくり致しました。謹んでご冥福をお祈りいたします。氏は日頃より上磯弁の収集整理に力を入れておりましたので、奥様のご了解を得て、『北海道・上磯弁整理メモ』（平成十三年二月二十八日作成）の一部を抜粋して掲載し、氏の思いを偲びたいと思います。

（事務局長　小松直樹）

『北海道・上磯弁整理メモ』

（平成十三年二月二十八日作成）

東京上磯会の例会には、これ迄欠席続きでしたが、今年も参加も出席がほぼ絶望的となりまして、内心忸怩たるものがあります。

それゆえ謝罪の意味合いを含めまして、標記のミニ資料を作成し、会員の皆様の望郷の一助に供するものです。然し乍ら、短かった少年時代の記憶を補うため、また正確を期するため十年前に発行の「北海道弁・函館弁」に依存したことを附記し、著者の故川内谷繁三氏に深甚なる謝意を表する次第です。

なお、誰方かがこの試験的収集を校閲し、増補改訂判として取り纏めて戴けるならば、文字通り望外の喜びに存じます。

【アの部】アズマシイ（ゆったり、満足な）　アッタラ（あんな）　アッペ（逆さま）　アメル（発酵して臭くなる）　アヤツケル（綾をつける、人前で目立つ行動をする）　アンベワルイ（調子悪い、具合が悪い）

【イの部】イイフリコキ（人前で出しゃばっていろいろなことをする人）　イズイ（目にごみが入ったり、靴や石ころが入って違和感がある状態）　イッチョウマエ（一人前）　イタマシイ（損した、残念だ）

【ウの部】ウソコギ（嘘つき）　ウダデ（とんでもない、呆れた、すごく、ひどく）　ウマッコ（お年玉）　ウンダガ（そうかい）

【エの部】エガベ（イイダロウ）　エラネゴド（要らぬこと、余計なこと）

【ヌの部】ヌグイ（暖かい）　ヌクダタル（自分を温める）

【ネの部】ネマル（横に寝そべる）

一部を抜粋しました

ふる里だより

「北斗市」誕生に思う

上磯地方史研究会会長　落合　治彦

平成十八年二月一日、「大野町」と「上磯町」が合併して「北斗市」となってから、四年が経ちました。

最初は「北斗市」の呼び方になかなか馴染めませんでした。今でも時々、住所欄に「上磯町」と無意識のうちに書くことがあります。

電話では、つい通りが良いから「上磯」を連発します。これは私の頑固な性格や年令のせいばかりではありません。

振り返ると、当時の「合併説明会」に一度より出ておりませんが、印象としては、「三割自治」「少子高齢化」「権限移譲」等の言葉がやたらに多く「何故大野町と合併しなければならないのか？」「両町民は真に合併を望んだのか？」と云う説明が少な過ぎました。

「函館市」「木古内町」も含めた大同合併を考えるのも選択肢の一つだと私は心底思いました。しかし、町政の関係者は「大野町との合併を期限つきで実行する」と云う国や道の方針を受け、苦渋の選択を迫られたと思われます。

郷土誌の上から見れば、「明治の大合併」で「有川村」と「戸切地村」が合併して郡名であった「上磯村」となり明治十二年（一八七九年）四月三十日に「上磯村他四ヶ村」の戸長役場を置きました。

その後周辺村々の合併をすすめ、大正七年（一九一八年）「上磯町」となりました。「昭和の大合併」で、昭和三十年（一九五五年）二月に「茂別村」を編入しました。合併特令法による、合併奨励金や補助金や交付税の削減等、いわゆるアメとムチ政策をちらつかせた「平成の大合併」で、全国の三二〇〇超の市町村は約半分の一七六〇に減少し、道内では二一二から一八〇となり、各方面への及ぼした影響は大きなものがあります。今回の「北斗市」の誕生は住民感情無視の国の行政方針で行われたものであり、将来自分の孫子に胸を張って説明出来るかどうか一抹の不安があります。

只唯一の救いは合併劇によって、日本各地に雨後の筍の様に出現した「カタカナ」や「ひらがな」の地域文化の伝統と歴史を無視した地名ではなく、道南の地でありながら漢字の「北斗市」となったことです。

またお会いしましょう！

長内　郁子
北斗市七重浜在住

東京、札幌在住の上磯会の皆々様、お元気にお過ごしの事と存じます。数年前になりますが、合同で御来市下さいました折、七重浜住民センターれいんぼう～で開催されました夕食会に、七重浜地区、追分地区出身の方々にお招き頂きました。その時昼食会エイド03でのホッキごはん、ジャガイモと久し振りの昔懐かしい味に大満足の様子だったのを覚えております。思う存分満喫された事と推察致しました。出席された皆様方が上京された当時は、青函連絡船での離道が常だったと存じますが、昭和二十九年の台風による洞爺丸事件をきっ掛けに三十有余年をかけ開道された青函トンネルのお陰で時間の短縮と安全の面でも大きく変貌した現在を考えても見なかったでしょう。そして今又七年後位になるでしょうが、新幹線の工事が着々と進められており、開通が待たれております。更に短時間で行き来が出来る様になります。それにつれて街並もすっかり整備され、大きな総合文化センター「かなで～る」を始め新しく久根別住民センター「く～みん」も開設され、真新しい機能的な施設で住民の憩の場とし、又研修の場と広く多勢の住民に使用されております。都会では味わう事の出来ない、のんびりした生活も堪能致しております。自然豊かで風光明美な故郷を持ち皆様方には誇りに思い自慢出来るものと確信致しております。どうぞ中央からの一早い情報を当市に反映下されます

真心で親切・丁寧に人生のセレモニーを行います
株式会社　石崎公益社
代表取締役　石崎　幸男
住所　：北斗市　飯生1-9-5
TEL　：0138-73-3393
FAX　：0138-73-8020
http://www.coaplan.net/hokusou/hakodate/ishizaki/

北海道新聞　日本経済新聞
有限会社　宮崎新聞販売所
代表取締役　宮崎　高志
住所　：北斗市飯生1-12-1
TEL　：0138-73-2228
：0120-09-2227

事を願っております。

合併して新しく歩み出した北斗市の未来の為にお互い協働していければ幸いかと感じています。皆々様の御健康と益々の発展を祈念致し、又の御来市を心待ち申し上げます。

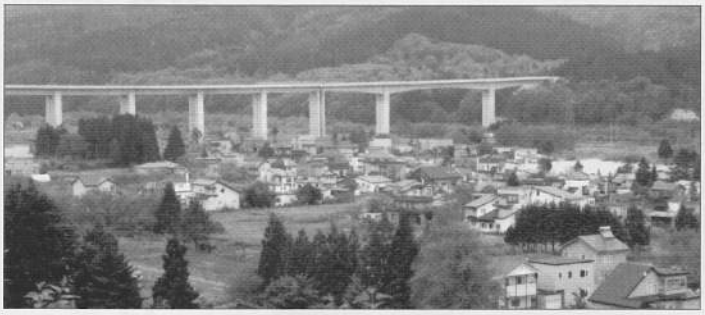
～茂辺地は今～

佐藤　恵子
北斗市茂辺地在住

平成十五年度に着手された函館江差自動車道の茂辺地地区の外観が姿を現し、それに伴っての住民の移転や新しい地域での住宅の建設が行なわれている。二〇一一年に開通の予定である。

茂辺地も過疎化が進み、小・中学校に在籍している児童は合わせて五十人に満たないとのこと…淋しい限りである。ちなみに現在の茂辺地地区の人口は一四九八名。街が変わり人口も減ってはいるが、変わらないものもある。豊かな自然と、故郷へ帰省する人々を迎える街の人たちの笑顔は今も昔も変わらずに優しい。

私は茂辺地に住んでから二十年余りが経ちました。現在、保育士をしながら、趣味の写真をしております。主に道南の風景写真や花などを撮っており、海あり、山ありの茂辺地には沢山の素晴らしいところがあります。



函館江差自動車道の茂辺地の景観

北斗市出身芸能人　ふる里共演チャリティ

東京にて活躍しております旧上磯町および旧大野町出身の芸能人（東京上磯会の会員を含め）が、地元で活躍しています芸能人との『ふる里共演チャリティ』に出演します。

日時：　平成２１年９月１９日（土）午後２時　開場　午後３時　開演
場所：　北斗市総合文化センター（かなでーる　大ホール）
出演：

《東京》　玉川カルテット（漫談）
金谷　博治　（民謡歌手・旧上磯町谷川出身・三橋美智也氏実弟）
玉川　平太朗　（漫談・旧上磯町谷好出身・高橋　博）　会員
上原　和　（歌謡・旧大野町本町出身）
佐藤　晃山　（尺八・旧上磯町川原町出身・佐藤茂雄）　会員
武井　満野子　（演舞・旧上磯町峩朗出身・旧姓根津）　会員

《地元》　三浦　かずえ　（歌謡・旧大野町一本木出身）
北条　智子　（歌謡・旧上磯町七重浜出身）
川原　八枝子　（歌謡・旧上磯町七重浜出身）
南　喜久敏　（三味線・旧大野町本町出身）
阿部　美代子　（歌謡・旧上磯町水無出身）
高田　ともえ　（歌謡）

司会　実行委員会　石崎　幸男

後援　北斗市・市教育委員会・市社会福祉協議会他４団体
北海道新聞函館支社・函館新聞

協賛入場料　ＡＳ席　２５００円　ＢＳ席　２０００円　入券　１５００円

＜チケットの販売・お問い合わせ＞
チャリティ実行委員会・山下　勇吉（ＴＥＬ　0138-73-6755）宛てにお願い致します。

第15回総会・懇親会のご案内

“上磯弁で喋らないかい！”

初秋の候、いよいよご清祥のこととお慶び申し上げます。今年の総会と懇親会は記念すべき15回目の節目となりますので、『皆様にアッ！？と喜んでいただける催しを企画しています。』

例年通り友人知人をお誘いの上たくさんの方々の参加をお待ちしております。

日　時　2009年10月17日（土）13：00～16：00

場　所　『ホテルパシフィック東京』30階スカイラウンジ（ブルーパシフィック）
東京都港区高輪3-13-3　Tel 03-3445-6711

会　費　男性　10,000円（年会費2,000円含む）
女性　9,000円（年会費2,000円含む）
＊夫婦同伴は2人で16,000円（年会費2,000円含む）
＊夫婦会員は年会費1人のみで可
＊年齢80才以上の会員は年会費免除で懇親会費（男性8,000円・女性7,000円）のみ

平成20年懇親会風景